

質問

乳がんが再発し、抗がん剤治療を受けています。1カ月ほど前から気分が沈みがちで何事にもやる気が起こらず、外出するのもおっくうになってきました。がんや治療の副作用で「うつ」になることがあると聞いたことがあります。『うつ』なのでしょうか。

治療の副作用で「うつ」?



多田 幸雄

徳島大学病院

精神科神経科特任助教

回答

乳がんの再発のショックがさめやらないまま、抗がん剤治療を受けておられるのではないかと推察します。精神的にも体力的にも大変な状況だと思えます。ご質問の件ですが、まず「うつ」という言葉が何を指しているかが問題になります。最近よく聞かれる言葉ですが、一般的には正常な範囲の気分の落ち込みに使われることが多く、自然と回復に向かいます。

今回の質問は、そういう意味ではよく、気が客観的に

精神的な支援が重要



上に何事にもやる気がしない状態が長期間続いているので、正常ではない「うつ状態」のようです。こうした「うつ状態」に、倦怠感や食欲不振、睡眠障害などの身体症状が重なった状態が長期間持続するときは、「うつ病」という疾患が疑われます。

「うつ状態」はがん患者の約30%でみられるといわれています。がん患者と一口にいってもいろいろな種類（乳がん、大腸がんなど）や病期（がんの進行具合）の方がいます。一般にがんになったのだから、落ち込むのは当たり前と判断されやすいことが問題です。

もちろんがん自体や、抗がん剤治療などの影響で「うつ状態」になる方もいますが、実は日本のがん患者の約5%が「うつ病」に罹患しているといわれています。一般人口では約2%といわれていますので、2倍以上です。この数字を多いと捉えるか、少ないと捉えるかは人それぞれですが、「うつ病」に罹患しているかどうかにかかわらず、さまざまな背景から精神的に支援が必要の方が多くは確かです。

もう少し具体的に説明しますと、がん患者の「うつ状態」は、痛みや吐き気などの身体症状、金銭面や介護面などの社会的問題などが併存していることが多いため、日常接する主治医、看護師に加え、薬剤師、ソーシャルワーカー、理学療法士、管理栄養士、臨床心理士など多職種との連携が重要になります。

その対応を主にしているのが、がん相談支援センター（がんの進行具合）の方がいます。がん診療連携拠点病院に設置することになったのだから、落ち込むのは当たり前と判断されやすいことが問題です。

もちろん徳島大学病院前と判断されやすいことが問題です。

もちろんがん自体や、抗がん剤治療などの影響で「うつ状態」になる方もいますが、実は日本のがん患者の約5%が「うつ病」に罹患しているといわれています。一般人口では約2%といわれていますので、2倍以上です。この数字を多いと捉えるか、少ないと捉えるかは人それぞれですが、「うつ病」に罹患しているかどうかにかかわらず、さまざまな背景から精神的に支援が必要の方が多くは確かです。

もう少し具体的に説明しますと、がん患者の「うつ状態」は、痛みや吐き気などの身体症状、金銭面や介護面などの社会的問題などが併存していることが多いため、日常接する主治医、看護師に加え、薬剤師、ソーシャルワーカー、理学療法士、管理栄養士、臨床心理士など多職種との連携が重要になります。

その対応を主にしているのが、がん相談支援センター（がんの進行具合）の方がいます。がん診療連携拠点病院に設置することになったのだから、落ち込むのは当たり前と判断されやすいことが問題です。

もちろん徳島大学病院前と判断されやすいことが問題です。

気軽に専門医受診して

がんに関する質問は徳島がん対策センターへ電088(634)6442(平日午前8時半から午後5時まで)にお寄せください。詳しくはセンターのホームページ<http://www.toku-gantai-saku.jp>をご覧ください。